

富山新聞文化賞

富大医学部第2外科教授 塚田一博氏

石橋たたいた上で渡る 市民公開講座で情報提供

《消化器系の中でも治療が難しい肝臓・胆道・膵臓を専門とし、新潟大時代を含めて国内でもトップクラスの治療実績を挙げている》

●挑戦に値する分野

第2外科では年間400例ほどの手術を行っており、そのうち肝臓・胆道・膵臓は120例から130例ほどです。この分野を選んだのは、根治率が100%に至っておらず、これから発展すると考えたからです。難しい分野ではありますが、その分、チャレンジに値する、やりがいのある分野だと思っています。

《外科医は産科医や小児科医などとともに、担い手不足が指摘されて久しい》
外科医にとって最も必要なのは「恐れ」だと思います。単に怖がるというのではなく、外科医は石橋をたたいた上で渡る勇気を持たなければならない。石橋をたたいても渡らないのは駄目です。手術をする場合は、99.9%成功すると判断できて初めて執刀します。その自信を持てるまでに15年から20年はかかると思いますが、若い医師には石橋をたたいて渡る勇気を持ってほしいと思っています。

《新潟大時代の1988年、肝臓移植を学ぶため半年間、米・ピッツバーグ大に留学した》

日本ではまだ移植ができない時代でした。ピッツバーグ大は肝臓移植ではトップレベルの実績があり、そこで働いていた日本人医師の講演を聴いて手紙を書いたんです。移植手術の現場で、肝臓をすべて取り去った視野は衝撃的でした。自分も移植はできるという思いは持っていましたが、一人ではできないことを痛感しました。多くのスタッフが目標に向かって心を一つにすることの大切さ、チーム医療の重要性を学びました。

《2006年に富山新聞社などと医療と食の充実推進協議会を設立し、これまで15回の市民公開講座「がん治療最前線」を開いてきた》

●患者とともに闘う

どんな病気であれ、治療は医師の専権事項ではありません。患者さんや家族に病気と闘う気持ちを持ってもらった上で、われわれ医師が手助けをする。それを伝えたくて市民公開講座を続けてきました。われわれが意図したところは少しずつ伝わっているのではないかと思います。

《今年7月には富山市で日本消化器外科学会の総会を開催する》

富山で7千人規模の医学会を開くのは、過去にもあまり例がないと思います。

せっかくの機会なので、全国から集まる人たちに富山の素晴らしさもアピールできればと考えています。

つかだ・かずひろ 栃木県栃木市出身。新潟大医学部卒後、助手、講師を経て1997年に富山医薬大（現富大医学部）教授。第67回日本消化器外科学会総会会長。日本門脈圧亢進症学会、日本胆道学会の理事。富山市在住。61歳。

（3月4日付富山新聞掲載）